

# 最優秀賞

## これからの私達にできる事

渋川市立渋川南小学校6年 中村 ころろ

私には、今年で九十六歳になるひいおばあちゃんがいます。耳は遠くなったけれども元気です。小さい頃から戦争中の話は何度も聞いてきたけれど、改めて戦争について考えてみたいと思いました。

私のひいおばあちゃんは伊勢崎市出身で八人兄弟の末っ子です。よくひいおばあちゃんは兄妹の話や通っていた女学校の話をしてくれます。ある日、ひいおばあちゃんは私に戦争中に落ちた爆弾の話をしてくれました。ひいおばあちゃんのいた伊勢崎にも落とされました。前橋ではたくさんの方が亡くなったそうです。そして、私の住んでいる渋川にも爆弾は落とされました。私は、身近な所ではそこまで戦争の被害はなかったのかなと思っていたのでおどろきました。聞いているだけでもこわくなるような話をひいおばあちゃんは実際に経験したのだと思うと、本当におそろしい時代だったのだなと思います。また、戦争中に使っていた物を見せてくれたこともありました。ひいおじいちゃんが戦地で使った望遠鏡や爆発した建物からにげる時に持っていた時計などです。実際に当時の物を見てみると、戦争は本当にあったのだなと思い知らされます。色々聞くことで私はたくさんを知ることができました。これはとても貴重な事だと思います。ひいおじいちゃんは手記を残しています。いつか読んでみようと思いました。

母から母方のひいおじいちゃんの話も聞きました。私が生まれる前に死んでしまったので会ったことはないけれど、明るくとても面白い人だったそうです。そんなひいおじいちゃんでしたが、母は一度だけとても不機嫌にさせてしまった事があったそうです。それは母が戦争中に使っていた水筒を見つけてきた時でした。その時ひいおじいちゃんは「そんな物は見つけてこなくていい」と怒ったように言ったそうです。母はその様なおじいちゃんを見たことがなかったので忘れられないと言っていました。戦争はもうくり返してはいけないことだから今の子供達が戦争について予習する必要はないし、前をむいていてほしいと願っていたから、戦争の話を好まなかったんだと思うよと言いました。戦争のことを伝えたいひいおばあちゃんと、あえて伝えたくないひいおじいちゃん。考えは真逆だけれど二人とも戦争をくり返してはいけないという思いは共通していることがわかりました。

私はテレビで泣きながら戦争の話をしている人を見ました。終戦記念日がくるたびに辛い思いをして話してもらうのはどうかなと私は思ってしまいました。伝えるのが自分の役目だと思って辛いのに話してくれているのなら、いつまでもその人に話してもらうのではなく、その話を聞いた人が、今度は伝えていくのもいいのではないかと思います。体験した人の話はとても貴重です。でもいつまでもその人達に頼りっぱなしでいるのではなく、聞いたことを次の世代へつなげることが大切だと思います。私にもいつか子供ができれば、それらを伝えていきたいと思います。今の生活が当たり前ではないということと、平和への感謝を忘れずに毎日を過ごしていきたいです。

# 優秀賞

## 平和な世界にしていくために

渋川市立金島小学校6年 千明 帆那

私が平和と聞いて思いうかべるのは、「戦争」という言葉です。戦争は、多くの人の命をうばい、多くの人の心をきずつけました。

私は、テレビや本で戦争の事を知り、戦争の悲惨さ、平和の尊さについて考えるようになりました。

当時の日本では、小学生も学校で戦争の訓練をし、中学生は勉強をしないで、学校や工場で働いていたそうです。食事也十分にとれず、厳しい生活が続いていました。

私は、当時の子供達がこんな暮らしをしていた事を知り、今の私達の暮らしはなんて幸せなのだろうと思いました。昔は戦争の訓練をしていた小学生、学校や工場で働いていた中学生も、今ではちゃんと授業を受けることができます。そして、十分にとれなかった食事、今は朝、昼、晩、十分な量の食事をとることができます。

私はこのことを通して、平和の尊さを改めて実感しました。そして、二度と戦争をしないように、この日本を、世界中を平和にするために、私たちにできることを考えました。

その一つは、「差別をなくすこと」です。

女性と男性での差別、障がいのある人への差別、外国人への差別などが、今、国内外で起こっています。私たちは、そんな差別を絶対にしてはいけません。差別を受けた人はとても悲しい思いをするからです。これは一人一人の人権にも関わります。私たちは差別をしないだけでなく、障がいのある人や外国の人々に気づかいをする事も大切です。一人一人がその気持ちをもてば、世界はより平和になると思います。

二つ目は、「犯罪をなくすこと」です。

毎朝見るニュースでは、犯罪やいたずらなど、あまりよくないニュースもあります。私はそんなニュースを見ると、気持ちがしずんだり、少し暗くなってしまう時があります。

そんな気持ちになるのは、私だけではないと思います。

そして私は、犯罪と差別は同じものだと思います。なぜなら、だれか一人でもきずつく人がいるからです。ちょっとした差別や犯罪でも、それが原因で争いが起きたりします。

私たちは、どんな事があっても罪を犯してはいけません。犯罪をなくすことは、世界を平和にすることにつながります。

私はこの世界を犯罪も差別もない、平和な国にしたいです。私が考えた「差別をなくすこと」、「犯罪をなくすこと」以外にも、平和への取り組みはたくさんあると思います。

私は、いろいろな取り組みを考え、私の身近なところから平和な世の中にしていきたいです。

# 優秀賞

## 平和への一歩

渋川市立古巻小学校5年 ダグラス 初加音

この夏、家族で戦争と平和について話をしました。もし、今でも日本が第二次世界大戦を続けていたら、私は、大好きなパンを食べることもできないし、自由に本を読むこともできない、自分の思ったことを自由に発言することもできないと想像して、悲しくなりました。それに、私のお父さんの国の人達と、お母さんの国の人達が戦い、殺し合っていたと考えると、とりはだかたちました。戦争なんか、始めなければよかったのに、と思いました。

そして、三年生で勉強した「ちいちゃんのかげおくり」や、四年生で勉強した「一つの花」、去年お母さんと見た「デイゴの花」の朗読げきを思い出しました。それらのお話の中では、私たちのような子どもや、私のお母さんのような女性がぎせいになり、私のお父さんのような男性たちが戦いに行っていました。おなか为空いても、十分に食べられず亡くなった人。赤ちゃんがいても、お乳が出ないために、泣いている赤ちゃんを抱くことしかできず、最後にはその子を自分の手で殺さなければならなかった人。戦争に反対していても、そう言うこともできずに戦地へ行き命を落とした人。戦争がなければ幸せにいらしたはずの人々が、罪もないのに殺されてしまったのです。何ということでしょう。人間を人間でなくしてしまう戦争は、何とおそろしく、悲しいことでしょう。自分が望まないことを、「国のため」と言われ、無理矢理やらされてしまう、ということは、自分の頭や心、全てを占領されてしまうことだと思うのです。戦争は命だけでなく、心までうばってしまう、むごいことです。だから、私は戦争をすることに反対します。

しかし、今でも争いを続けている国があります。中東の国では、宗教や政治の考え方のちがいによって対立し、戦い、住んでいる家や街をこわされ、家族を亡くしたり、命をうばわれたりしている人がいます。私が宿題をいやがったり、おやつに何を食べようかなやんでいる間にも、そうすることさえ許されず亡くなっている人がたくさんいるのです。自分の命や、大切な人の命をかけてまで戦いたいのでしょうか。罪のない人の命や心をうばってしまうことを、私は許せませんし、許したくもありません。

では、私たちに何ができるのでしょうか。私は、おたがいのちがいを認め合い、考え合うことが大切だと思います。まずは、身近な家族や友達、社会の中で分かり合い、認め合う。そして、それを広めていくことで、平和な世界を築けるのではないかと思います。だから私は、友達と自分のちがいを認め、受け入れることから始めたいと思います。国のリーダーたちにも、みんなと一緒に平等に考えて欲しいと願っています。認め合う心が、広がっていきますように。

# 優秀賞

## 平和について思うこと

渋川市立三原田小学校6年 南雲 結衣

私は、今まで平和について、深く考えたことがありませんでした。それは、日本という国が、他の国と比べ、とても平和で安全な国だからだと思います。なぜなら、日本には日本国憲法三つの原則「平和主義」があり、日本は二度と戦争をしないという決まりがあるからです。しかし、昔は戦争がありました。毎年八月には、終戦の式典があり、ニュースやテレビ番組で戦争について知ることができます。また、私は沖縄旅行でひめゆりの塔に行ったことがあります。第二次世界大戦では沖縄の女学生がけがをした兵隊の手当てをしていたことや、その戦争で多くの女学生が命を落としてしまったことを知りました。そこで上映されているアニメ映画を見て、もう二度と戦争が起きてほしくないと思いました。

他の国では、今でも戦争をしている所があります。なぜ争いを起こすのか、私には分かりません。争いではなく、他に解決する方法があったはずです。争いでは、尊い命がたくさんぎせいになります。残るのは、亡くなった人たちの家族の悲しみときょうふやいかりだけだと思います。

争いをなくすためには、まず核兵器をなくすべきです。核兵器は一度に多くの人々の命を落とし、生活の全てをうばうおそろしい道具です。世界中から核兵器がなくなれば、戦争の武力が無くなり、争いのない世界に近づきます。世界が平和になるためには、他人を思いやる気持ちが大切です。

身近なことで考えると、最近では、インターネット上のトラブルがあります。例えば、ラインを使ったいじめや、オンラインゲーム上での争いです。また、そのことが原因となったり、インターネットの書きこみでひぼうちゅうしょうを受け、自殺をしたというニュースを見ました。ネットの書きこみは本名が出ないので、人をきず付ける言葉が言いやすいそうです。一人一人が他人を思いやり、ルールを守って生活をするのが身近な平和につながると思います。

私はこれからも友達や身近な人を大切に、思いやりをもって生活していきたいと思います。そして、だれもがあたり前に平和に暮らせる世界になることを願っています。そのために、自分ができることは何かを考えてすごしていきたいです。

# 佳作

## 過去から未来へ

渋川市立渋川北小学校6年 飯野 歩乃

昭和二十年（一九四五年）八月五日、二十二時四十分。

私が今までに一度も気にすることのなかったこの日時。今年の始めに前橋市住吉町二丁目自治会が設立した「あたご歴史資料館」に行かなければ、これから先も意識せずにいたと思うこの日。前橋は、B-29爆撃機九十二機による爆撃を受けたそうだ。この爆撃により前橋市街地二万八百七十一戸のうち全焼家屋が一万一千四百六十戸、半壊家屋五十八戸が被災したと記録されている。

当時の前橋市の人口九万三千百三十一人程で、被災者は六万七百三十八人、死者五百三十五人、負傷者六百人以上と公表されている。私の住む渋川市でも空襲があったという話を聞いたことがある。今までどこか遠くの出来事だと思っていた戦争を身近に感じる事となった。

毎年八月になると、よく目にする広島や長崎の悲惨な光景。前橋の被災に比べると死者や負傷者の人数は圧倒的に多いけれど、人の命の重さはみんな同じ。被害の大きさだけを見て、戦争を少し分かったつもりでいた私に、もっと身近で多くのことを学ばせてくれた「あたご歴史資料館」。

ここは、とても小さな資料館だが、ひとつひとつの展示物には苦難の時代を駆け抜けた人々の様々な「想い」が込められているという。それは、私が初めて見た古い前橋市の写真、昔のくらしが分かる服や道具などからもその「想い」が伝わってくる。そして、一番私の心にひびいたのが防空壕だ。私が見たせまい防空壕の中に小さな子どもからお年よりまで避難したらしい。だがこの小さな空間で多くの人が空襲の被害から身を守れたとはとても思えない。私には想像することもできないおそろしい光景だっただろう。被害にあった人がどれだけつらい思いをしたか、私にはまったく分からない。そして、これからは私たちがそのような経験をする事が無いように何が出来るか。

それは、「再び過ちをくり返さない、命のそんげんを語りつぐこと、そうした思いを私たちの町から発信したい。」という資料館設立のけい機となった町の人々の思いを理解し、どのような未来を目指すのか私たちが考えなければならない。それこそが今、私たちにあたえられた課題であろう。平和な未来のために。

# 佳作

## 同じことは二度とくり返さない

渋川市立渋川南小学校6年 岩川 昊

「長崎と広島に原子爆弾が落とされてから七十五年が経ちました。」というニュースを八月九日に、聞きました。僕は、このようなニュースを聞くと、「平和な今で良かった。」と思ってしまいます。なので、戦争や核兵器は見たり、経験したことはありません。そこで、広島と長崎の原爆についてを、亡くなった人々の気持ちも考えながら調べてみました。

「核兵器」と辞書で調べたら、「核反応を利用した兵器」と書いてありました。原子核や電子、光子などが衝突して行う反応が核反応です。原爆にはこの核反応が使われ、アメリカが落としました。空中で爆発した火が飛び散り一瞬で火に包まれたそうです。

また、新聞の「戦後七十五年」という記事に、「戦前・戦中に生まれた人は、日本の総人口中、十五、二パーセント（二〇一九年）」と書いてあり、戦争の記憶を現代人に伝えられなくなるのが課題だそうです。ぼくは、戦争や核兵器に対して大反対です。戦争をしていた時は、「戦争をして国のために死ぬのが立派だ。」という考えがふつうだったそうですが、今は全くちがいます。しかし、まだ戦争をしたり、核兵器を持っておどかしたりする国もあります。それを「自分は関係ない。」と思うのではなく、この地球上の全人類が解決して、平和にしていくことが大切であり、必要なのではないのでしょうか。自分も、これからは平和について興味をしっかりとって、原爆や終戦の日のもくとうがあったら、亡くなった人の気持ちをよく考えて、心をこめてもくとうが出来るようにしたいです。日本とアメリカも、最終的に平和条約を結べたのです。今戦争をしている国も人の命の尊さに気付いてもらえるように願っています。

この日本という国は、世界百九十六とある国の中でただ一つの被爆国です。ぼくは、戦争や核兵器のおそろしさ、ともに悪さを知り、戦争や原爆などで家族をなくした遺族の方々の気持ちがとても伝わってきました。僕は、戦争や核兵器を持つということは、情けないと思います。なぜなら、領土や食べ物などについては、人は話をして思いを伝えることが出来るのに、戦争で無理矢理にうばおうとするからです。なので、戦争をしない国は、「同じことを二度と絶対にくり返さない」ということを大切にしてほしいです。戦争が、この世の中になく平和な世界にしていくために、みんなで平和について深く考えて、興味をもつべきです。そして僕は、世界が一つになって平和になる日が、いつか来るのを信じています。

# 佳作

## 戦争のおそろしさ

渋川市立金島小学校6年 萩原 杏南

一九四五年の八月、広島と長崎に原子爆弾が投下されたから、今年で七十五年が経ちました。原爆では、数えきれないほどたくさんの人々が亡くなってしまいました。広島に原爆が投下される前日の夜、私が住んでいる群馬県でも爆撃機のB二十九から、爆弾が落とされたということを知りました。私のひいおばあちゃんは、前橋市で空しゅうにいました。前橋空しゅうでは、B二十九から約七百トンの焼い弾が投下され、前橋の中心街は火の海となり五百三十五人もの尊い命が失われました。その時、燃えさかる火災からにげるために、私のひいおばあちゃんは近くの川に飛びこんだそうです。川には、黒く焼けて亡くなっている人ややけどをしている人、ひいおばあちゃんのようにひ難している人などがたくさんいたそうです。亡くなっている人が浮いている川の中を、にげるようにさまよったひいおばあちゃんの気持ちを考えると、どれほどこわかったことだろう、と思いました。私のおじいちゃんも小学二年生のころに戦争を体験しました。渋川の空にもB二十九が飛んできて、家の裏にあった防空ごうに入ってひ難したそうです。その時は、爆弾が落とされるかとかわさにおびえながらかくれたそうです。おじいちゃんが一番こわかったと話してくれたのは、授業中に空しゅう警報が鳴った事だそうです。私も、授業中に突然サイレンが鳴りひびいたら、きょうふでかくれることすらできないと思いました。また、おじいちゃんのいとこは特こう隊に入り、アメリカ軍の船に自らぶつかっていったそうです。それは、自らの命を落としてまでアメリカ軍を倒そうと思ひ行動したということです。いとこは亡くなってしまったけれど、日本の国のために、命をかけて戦ったのではないかと思います。

原子爆弾は、いっしゅんで自分の大切な人や家族をうばってしまいます。家族を失った人達の気持ちを思うと、悲しい気持ちでいっぱいだったと思います。私は、この作文を通して、今こんなに幸せにらせていることは、とてもすばらしいことだと思いました。戦争中は多くの命がうばわれて、食料や物資もなく大変な生活を送っていたことも知りました。戦争は、絶対にしてはいけないと思います。争いごとは、武力で決めないで話し合いなどで決めたりする方が良いと思います。話し合えば、お互いを理解することができて、平等に決めることができるからです。そうすれば、世界中が戦争のない平和な毎日を送ることができるのではないかと思います。私はこれから、本や新聞などで戦争のことをもっと知り、原爆によって被害を受けた場所へ行ってみたりしたいと思いました。そして、多くの人に戦争のおそろしさや平和の大切さを知ってもらうような活動をしたいです。

# 佳作

## いのちをうばうせんそう

渋川市立古巻小学校3年 山田 かのこ

三年生になってから、でん記を読みたいと思い、何さつ目かに『アンネ・フランク』をえらびました。十五才の女の子がでん記になっているのは、なんでかなと思ったからです。

知らない言葉がたくさんでてきました。ヒトラーとはだれか、だい一次世界大戦、ユダヤとはどこの国か、強せいしゅうよう所、アムステルダム、れん行ナチス、ゲスタポ、アウシュビッツしゅうよう所。言葉だけでこわくなる気持ちでした。

わたしは、さいしょに平和・人けん・さべつ・せんそうを辞書で調べてみました。むずかしい言葉ばかりでした。

「ユダヤ人」だったアンネたちは、さべつを受けました。ユダヤ人というだけでしゅうよう所に行かせるというヒトラーの考えは悪いと思いました。

ヒトラーはドイツがうまくいかないせきにんをユダヤ人におしつけ、ユダヤ人をドイツのてきにしました。「ユダヤ人だったこと」がアンネたちをふこうにしました。ユダヤ人はさまざまけんりをとりあげられて、しゅうよう所に送られるといのちのせん別が行われ、子どもや病気の人、老人などはガス室でころされました。

「かくれ家」でくらしした毎日は、足音を立ててはいけない、友だちと会えない、外に出られない、知らない人と同じ部屋、大きな声を出してはいけない、食べたい物を食べられない。アンネの日記には、「日記だけが友だち」と書いてありました。

「しゅうよう所」では、同じベッドに9人がねかされていました。一日の食りょうは、うすいスープとパンひときりだけ。一日の仕事は、死体のしょ理やあなほり。チフスに多くのかかかって、アンネやおねえさんもチフスにかかってしまいました。

夏になるころに、いつもお母さんが日本にせんそうがあったことを話してくれます。わたしのひいひいおじいちゃん、ひいおじいちゃん、ひいおばあちゃんの弟さんもせんそうに行ったこと。せんそうは、国と国がたたかうおそろしいこと。だれもしあわせにしないこと。二度としてはいけないこと。

せんそう中は、たくさんの人たちがつらい思いしかなくて、ばくだんとかが落ちてきたり、食べ物かふそくしていたりしました。やりたいことができなくて、毎日がこわくてつらかったらうな、とむねが苦しくなりました。

北海道のひいおじいちゃんは、マレーシアのせん地でオランダへいに刀で右うでを切られました。はじめは竹のぼうでたたかれたと思ったけど、よくみたらブローンとなって取ってしまったそうです。強い人だとすごくすごく思いました。ひいおじいちゃんの左手は、お父さんよりすごく大きくて、右手の分まで左手が大きくなったのかなと思いました。ひいおじいちゃんを思いだすとみだが出ます。

もしもひいおじいちゃんがせんしてしまっていたら、お父さんもわたしも弟も生まれていないんだなあと思います。帰ってこれない人もいて、生まれてこなかったいのちもあ



ったと思います。

世界には百九十六ヶ国の国があるそうです。せんそうで今も苦しんでいる人たちがいます。なぜだろうと思います。いやです。

アンネは十五才でなくなってしまうました。「二年ぶりの外の世界でした。真っ青で明るい夏の空でした。」「生きていることに感しゃする。」「自由になりたい。」「さいごまでしよう来のゆめをもっていたアンネの言葉です。

未来にせんそうがないこと。外国と日本のさべつがない、人と人のさべつがなくなってほしい。地球が、みんなが、しあわせになりたいです。

アンネのお父さんの言葉「平和を作るために、なにかをする人になってください。」。なにかをできる女性にわたしもなりたいです。

# 佳作

## 平和な世界が続くように

渋川市立古巻小学校6年 岩淵 智也

ぼくは、戦争が二度と起こってほしくないと思います。今年で、終戦から七十五年が経ちます。実際に戦争の時代を生きて、その恐ろしさを体験した方も少なくなっています。ぼくが戦争について知っている事は、社会科の教科にのっている事や、時々テレビで見る事だけです。

夏休みに「はだしのゲン」という本を読みました。この本は、日本が戦争をしていた時代の話がかかれています。小学生のゲンの目を通して、戦争の恐ろしさを伝えています。マンガでかいてあるので、読書が苦手なぼくにもわかりやすかったです。

ぼくがこの本を読んで、特に恐ろしいと思ったのは、広島や長崎に落とされた原子爆弾です。建物の下じきになったゲンのお父さんは、火事にまき込まれて、ゲンの目の前で亡くなってしまいます。大けがを負った人達は、どこに逃げてよいのか分からず、さまよい続けます。町中が死体の山でうめつくされています。原子爆弾は多くの人を苦しめ、七十五年が経った今でも、多くの人がつらい思いをしている事を知りました。

ぼくがこの本を読んで、心に残っている言葉があります。

『日本のように資源のない小さな国は、他の国と協力して仲良くしていくしか、生きて行く道はない』

というゲンのお父さんが言った言葉です。今の時代では、当たり前な事です。でも、ゲンのお父さんは、非国民と言われみんなからいじめられてしまいます。

戦争は人の心をおかしくして、正しい事もわからなくしてしまいます。

ぼくは、戦争のない時代に生まれてきて、よかったと思います。でも、安心していただけではダメです。この平和がいつまでも続くようにしなければなりません。そのためには、過去に起こった戦争の恐ろしさや悲さんさをしっかり学び、忘れてはいけないと思います。そして、ゲンのお父さんが言っていたように「みんなで協力して仲良くする」気持ちを、いつまでも持ち続けることが大切だと感じました。

# 佳作

## 平和ってすてきだな

渋川市立豊秋小学校3年 小林 愛里紗

私は、今まで戦争のことについて、あまり知ることがなくて、『ガラスのうさぎ』や『ひろしまのピカ』など、本を読んだり、テレビで戦争のことを知ったりするしかありませんでした。本を読んで思いました。「戦争っておそろしい」「すべての物をはかいして、大切な家族をうばっていく」「空から、ばくだんがふってくる、その中でおびえながら、くらしていかなければいけないのだ」と。今の生活なら、おなかいっぱいごはんが食べられて、あたたかいお風呂に入ってテレビを見て、ねむくなれば、ふかふかのふとんでぐっすりねむれます。戦争中は、おなかがすいても、ごはんをおなかいっぱい食べられず、空しゅうけいぼうが鳴ったら、ねていてもすぐにひなんをしなければなりません。本を読んで、かなしくて私は、なみだが止まりませんでした。私のいせさき市の祖父母は、終戦後すぐに生まれました。小さい時はあまり物がなくて、いつもおなかがすいていたそうです。祖母の一番上のお兄さんは、戦地で死んでしまったそうです。祖母は、一度も会ったことがなかったけれど、写真を見るととてもやさしそうな顔で、生きて帰ってきてもらいたかったと今でも言います。絵を描くのがとても好きで、画家さんをめざしていたそうです。私も会って話をしたかったです。

日本は、「二度と戦争をしない」と決めています。とてもいいやくそくだと思います。外国でも戦争をしないでほしいです。戦争は、たくさんの人をくるしめて、大切な物をこわしていただけだと思います。ずっとずっと平和な世界でいてほしいです。そうすれば、大好きな家族がはなればでなれにならずにしあわせにすごせます。しかし、毎日のようにテレビのニュースや新聞では、さつ人じけんや小さい子のぎゃくたい、インターネットでの悪口などで悲しむ人がたくさんいます。今も平和な世の中ですか。戦争がなくても、つらい思いや悲しい思いをする人がたくさんいます。みんなが人の気持ちを考えることとやさしさをもって、人と人が仲良くささえあえば、本当の平和な世の中で、みんなが笑顔ですごせる毎日が来ると思います。この願いは、戦争でもっともっと生きたかった人たちもきっと、平和で、みんなが笑ってすごせる世界であってほしいと願っていると思います。私もこれから一生けんめい、戦争のことをべんきょうして、戦争中のくるしい思いや、今の平和な生活のありがたさなど、伝える事をふやしていきたいと思います。これからも平和な世の中がつつきますように。

# 佳作

## 歴史に残る戦争

渋川市立豊秋小学校4年 江口 翔

八月十五日は、第二次世界大戦終戦記念日の日だ。毎年八月六日には、広島市の平和記念公園で式典が行われる様子をぼくはテレビでみることにしている。もくとうして戦ぼつ者をとむらう大切な時間だ。六日は広島に、九日には長崎にと、米軍によって原子ばくだんが投下されたのだ。広島では14万人以上、長崎では7万人以上の命がうばわれ、多くの人々は放射線による後い症で苦しんできたのだ。なんてむごいことか、人間の身勝手な判断と行動は、まるで無差別テロのようだ。戦後75年、この不幸なできごとや体験者の心のさげびが広く世界中に語りつがれて教訓となっている。黒く焼けた当時のままの原ばくドームが、その悲げきを物語っているように思う。

一九四五年三月の東京大空しゅうでは、焼い弾による都市が無差別ばくげきを受け、家も街もみんな焼きつくし、一面焼け野原となり、まるでにげ場がない地ごくのようだ。

ぼくの曾祖母（昨年百一才で他界した）の家でも、東京からそ開者が来ていたので、住居や生活必じゅ品等に苦労したり、サツマイモをよく食べたと話していた。家族や親せきにも戦死者が何人もいたようだ。部屋には、はげしい戦場だったビルマ戦で戦死した人の写真がかざってある。曾祖母の口ぐせは、

「家族を守り、子供を育てるため、生きるために一生けん命働いた。今が一番幸せ、何事にも感しゃ。」だった。すでに他界している曾祖父も戦場で頭にケガをして、十数針ぬう大けがで命拾いしたそうだ。ぼくはこの時代の人、悲しく、つらい思いをしながら、うえやきょうふと戦いながらも頑張りぬいて力強く生きてきたんだな、と思った。

六月二十三日、テレビのニュースで沖縄での追とう式の様子をみた。はげしい地上戦でぎせい者は20万人以上、その中には、日本軍によって集団自決した住民もいたというからなんてざんこくでおそろしいと思った。平和のいしずえの前で手を合わせ涙する人、なんのつみもない住民がぎせいになり、命をなくしてしまったこの戦争の悲げきにぼくは思う。「戦争したって何もいいことない。核兵器の目的は何、自国を守るため、他国をせめるため、使わないでほしいよ。使えば日本のようにみんなが不幸になるし、悲しくつらい思いがずっと続くんだから。」と。

今年新型コロナウイルス感染症続きでマスクが店頭から消えてしまったり、特効薬もなく、世界で50万人以上の人々が亡くなってしまった。今普通の生活にもどってきたけど、油断はできない。

ぼくの周りには、食べ物や生活必じゅ品等があふれていて、何不自由なく暮らしているが、時々はふり返ってみることにする。何もなかった戦争中と、戦後のことを。そして、その時代を生きぬいてきた人達のことを。

ぼくは、戦争の悲げきを本で読んだ。テレビでみた。そして、平和が一番だと思った。

# 佳作

## 平和を願って

渋川市立渋川西小学校5年 外丸 莉亜夢

ぼくは、2019年7月19日、ベトナムへ行きました。色々な所を観光して、その中でも一番印象に残っているのは、クチトンネルです。戦争の時に使われたトンネルがそのまま残っていて実際に中に入って体験ができました。館内へ入ると本当に戦争で使われていた銃が山ほどならんで置いてありました。ぼくは、本物の銃を見るのは初めてでビックリしました。さらにトンネルへの見学におくへ行くと、人が一人入れるような小さなかくれる穴があり、ありのすのような、人間が入れる大きさのトンネルがありました。15mの井戸、会議室、しゃげき場もそのまま残されていてベトナム戦争の司令部もここに置かれていたそうです。ばくだん、おとし穴、わな、しかけなどの説明を見て、むかしここでどんな生活をして、どんな気持ちだったのかを想像して悲しくなりました。このかくれトンネルの中で赤ちゃんを産んだ人もいて、今もトンネルベイビーとよばれ集まりをもっていると聞きました。

米軍戦車もそのまま残されていて、とても大きく近くでみるとこわかったです。トンネル入り口の部屋の階段を下り入ってみると、6人の人形があり、むかしの作業をしている姿が見れました。

トンネルの中を見学してぼくは、色々なことを思いました。このトンネルの中でなくなった人もいたのかな。暗くてこわくなかったのかな。みんな家族とばらばらで生活していたのかな。

むかしの人の気持ちはわからないけど、絶対にこのトンネルの中で今みたいに楽しい生活はできないから、みんなつらかったと思います。

トンネルをほり暗やみで、いつおそわれるかわからない恐怖の生活だったと思います。

日本では今戦争はないけれど、世界ではまだまだ戦争で苦しむ人たちがたくさんいることを知っています。

平和な世界にするためにぼくができることは、ベトナムで見てきたこと、聞いてきたこと、感じたことをまわりの友だちに話し、伝えることだと思います。戦争はこわくかなしいことだとみんなが思えば、戦争する人がいなくなると思っています。

世界中の人たちが安心して生活できる日が来るように伝え続け、戦争がなくなるよう願っています。

# 佳作

## 歩みより

渋川市立渋川西小学校5年 樋口 陽希

ぼくは、戦争の事をくわしく知りません。両親や祖父母ももちろんですが、そう祖父母はその時代をけん命に生きていたはずです。国と国とが武器や軍隊を使って争い、たくさんのおとうとい命が失われる。「戦争なんて行きたくなかった。経験したくなかった。」とだれもが思ったことでしょう。無事に生きのびられたのならいいかもしれませんが、ほとんどの人達が戦地で命を落とし、また帰かんで来たとしても命を落とした戦友を思い、愛する家族を失い自分が帰かんで来た事に心を痛めた人もたくさんいたはずです。愛する家族、友とはなれ別れ二度と会えなくなる。これが自分だったらと想像するだけで、体がふるえ声も出ない。目頭が熱くなり、なみだがあふれ出そうになります。

戦争のない平和な世界をつくるには、全てにおいて人と人との「歩みより」が不可欠ではないか、とぼくは考えました。歩みよりとは、おたがいがゆずり合って考えや想いを近づける事です。

戦争という過去のひつうな出来事は変えられません。それなら平和というおだやかな未来に変えていけばいいとぼくは思います。

では、その未来のために今のぼくに出来る事は何か。たった十才のぼくの出来る平和への一歩は、まず感しゃする事です。このつながれた命を大切にし、守って生きていく。雨風をしのげる家があり、温かい食事をいただく事ができ、安心して眠れる。こんな毎日を当たり前だと思ってはいけない。戦中では決して当たり前ではなかったはずです。学校ではたくさんの友や先生と勉強もできることの一日一日を、感しゃして過ごしていきたいと 생각합니다。

そしてもう一つは、ぼく自身が健康で平和でいる事です。心も体も元気で、争い事や心配事もなくおだやかな毎日を過ごす事。ぼくにとって何よりこれは、家族の存在がなければ成り立ちません。家族、家庭が平和でなければ、ぼく自身が平和になる事はありえないからです。まずは自分から、そして家族から地いき、そして日本中、世界へと広がって、人々が歩みよりの心を持ち続けていけば、本当の平和までたどり着くのではないのでしょうか。

人と人が一歩歩みよれば目を見る事ができ、また一歩歩みよれば、手を取り合う相手ができます。かたをよせだき合う事が出来ます。そうすることで心までも通じ合えます。

本当の平和とは心の歩みよりなのだと思強く強く思います。

# 佳作

## 平和についての考え

渋川市立三原田小学校6年 狩野 和心

私は平和について、とても大切なことで、これからもずっと続けなくてはいけないことだと考えています。

私は夏になると、戦争についての番組を見る機会が増えます。特に多いのは、原ばくについての番組です。原ばくのこわさを、私はテレビで習いました。最近見た番組では、原ばくを落とす側、つまりアメリカの原ばく作りや実験の様子をまとめたものがありました。私は、その映像を見たとき、原ばくのこわさを改めて知りました。原ばくが投下された時にいた人たちの話を聞くと、どれも思い出したくないような、信じたくないような現実しかありません。原ばくが投下された後の絵を見ても、考えたくないようなものばかりです。このようなものを見ると、自分たちがいかに平和な世界で暮らし、また、自由に生き、とても幸せな生活をしているのかがよく分かります。戦争中に比べて、食べ物があり、家族みんなでいっしょにいれるありがたみ、何不自由なく暮らしているということも分かります。

私は、他にも戦争についての本を読むことがあります。教科書では、いっしょうけんめいなりきって読むようにしています。自分は、戦争を体験したことがないので、少しでも戦争について知れたらと思って読んでいます。

戦争は、つらくて苦しいものです。日本もふくめ、多くの国は、もうその苦しみを味わっていないけれど、一部の地域ではまだ戦争が続いています。戦争は、あってはならないものです。私は、世界にそんな苦しみを味わっている人がいると信じたくありません。でも、それは夢ではなく現実です。なので私は、この現実を変えなくてはならないと考えています。

私は平和について、とても大切に、ずっと守っていかなくてはならないことだと考えています。戦争は、つらく苦しいものです。なので絶対に戦争があってははいけません。そのために私たちは、平和について考え、平和な世界を続けていくことが大切です。でも、まだ戦争がある国もあります。いつか、世界から戦争が無くなって、世界中の人々がみな平和な世界で、みんな仲良く笑顔でくらすようになったらいいなと考えています。